

2003年1月10日

人間科学研究科委員長 殿

石川 利江氏 博士学位申請論文審査報告書

石川 利江氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱をうけ審査をしてきましたが、2002年12月25日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名 石川 利江
2. 論文題名 在宅介護者におけるソーシャルサポートが健康感に及ぼす効果

3. 本論文の主旨

高齢者の介護が問題になるにともない、在宅介護者の負担も問題になってきた。しかし在宅介護者の健康に関する研究は、それほどなされていない。健康にとってソーシャルサポートが重要であることは、健康心理学でつとにいわれていることである。そこで本論文は在宅介護者の健康感（心理的健康意識）と彼らに与えられるソーシャルサポートについて心理学的な検証を試みたものである。

4. 本論文の概要

第1章では、在宅介護者の健康とソーシャルサポートに関する研究を概観し、ソーシャルサポートの測定方法や研究対象者の抽出方法の問題、在宅介護者の健康感に対するソーシャルサポートの効果検討の不十分さ、ソーシャルサポートの介入研究の少なさなど、これまでの研究における問題点を指摘した。

第2章では、本論文の目的と意義を述べた。今後ますます増加すると予測される在宅介護者に対する具体的支援を考えるためには、様々な側面からソーシャルサポートが在宅介護者の健康感に対して影響するメカニズムを明らかにしていくことが必要であることを述べた。

第3章（研究1）では、まず、在宅介護者の支援状況を明らかにするために、公的機関における在宅介護者に対する精神的支援についての質問紙調査を行った。その結果、要介護高齢者に対する支援策と在宅介護者への支援とが混同されており、在宅介護者への精神的支援が十分機能していないといった現状が明らかにされた。

第4章(研究2)では、知覚的サポート量、サポート源、サポート実行度、サポート満足度という多面的回答が得られる在宅介護者のソーシャルサポートの測定尺度を作成し、その妥当性と信頼性を確認した。その結果、多面的回答の得られる在宅介護者のソーシャルサポート尺度として有用性の高いことが示された。

第5章(研究3)では、調査対象者の負担を軽減するために、尺度の簡略化が測られた。その結果、在宅介護者の情緒的サポート、実際のサポート、非効果的サポートが評価可能な、妥当性と信頼性の高いソーシャルサポート尺度が作成された。

第6章(研究4)では、在宅介護者の健康感とソーシャルサポートの現状を把握するため、介護を行っていない比較群を設けた検討を行っている。その結果、女性在宅介護者の健康感は低下しやすいが、得点自体をみると男女在宅介護者ともに悪い健康感ではないことが明らかになった。しかし、在宅介護者は介護していない者よりも、ソーシャルサポートが低く、孤立しやすい可能性が指摘された。

第7章(研究5)では、在宅介護者のソーシャルサポートと介護ストレスについて、在宅介護者の性別と要介護高齢者との続柄の面から検討した。その結果、男性在宅介護者は、充実感に満ちて介護を行なっているが、嫁在宅介護者は、非効果的サポートを多く受けていると評価し、介護バーンアウトが最も高かった。さらに、非効果的サポートは介護バーンアウトを促進することが明らかになった。

第8章(研究6)では、要介護高齢者の寝たきり度や痴呆レベルによる在宅介護者の健康感やソーシャルサポートの相違を検討した。その結果、要介護高齢者が完全に寝たきりになると、むしろ情緒的サポートが高くなり、要介護高齢者の痴呆レベルも重度化すると、非効果的サポートが減少することが示された。

第9章(研究7)では、在宅介護者の健康感とソーシャルサポートの関連性検討のために必要となる在宅介護者ストレスコーピング尺度を作成した。認知的対処、問題解決的対処、気分転換対処、ソートストップング対処、サポート希求対処の5因子が抽出された。構成概念的妥当性と信頼性に問題はなかった。

第10章(研究8)では、在宅介護者の健康感を、ストレス、ソーシャルサポート、ストレスコーピング、介護効力感を含めたパス解析を行い、在宅介護者の健康感にソーシャルサポートが影響するメカニズムのモデル化を試みた。在宅介護者の情緒的サポートは、在宅介護者の気分転換対処や介護効力感および健康感に対して有意な規定力を示し、在宅介護者の健康感にとっての有効性が示された。非効果的サポートは、介護バーンアウトを促進する可能性が高いことがわかった。気分転換対処は介護効力感および健康感にとって、極めて有効な対処法であることが明らかになった。

第11章(研究9)では、2年間にわたるコンピュータネットワークによる在宅介護者に対するソーシャルサポートの試みの結果を分析した。ネットワークへの参

加は介護の長期化に伴って低下しがちな在宅介護者のソーシャルサポートを維持し、介護からの気分転換となり在宅介護者の精神的健康を改善する効果が示された。

第12章の総合考察では、研究的背景の中でとりあげられた問題点が、本論文でどのように解決されたかについて考察を行い、第3章、第6章、第7章、第8章で明らかになった在宅介護者のストレス、健康感の状況について考察を行った。その後、本研究の主眼であった、在宅介護者のソーシャルサポートの肯定的側面と否定的側面が、健康感にどのように影響するのかというメカニズムを明らかにし、その検証として、新たなサポートネットワークを提唱した。日常的、慢性的ストレス状態にある在宅介護者の健康の維持・改善のためには、ソーシャルサポートに支えられた気分転換対処の重要性が指摘された。

5. 本論文の評価

在宅介護者に対するソーシャルサポートの必要性に関して一般に認識が不十分なのではないかということから、本論文では全国17市町村の公的機関が在宅介護者に対してどのような対応をしているかを調査することからはじめている(研究1)。結果は予想どおり認識が低く、この問題を研究することの意義が確認された。

そこでまず在宅介護者へのソーシャルサポートの内容と程度を測定するための心理学的尺度の作成が必要となり、その作成を試みたがその際今まであまり認識されていない、否定的なソーシャルサポート(介護者にとってありがたいいわくなもの)の存在をも仮定してなされた(研究2,3)。その結果、信頼性と妥当性のある新しい尺度を作成することができた。このことは評価に値するものである。

在宅介護者へのソーシャルサポートの程度と彼らの健康感(健康感尺度で測定)がどのような状態であるかを検証するために、条件を等質にそろえた非介護者(通常の人)との間で比較検討した(研究4)。その結果、在宅介護者の特徴が浮き彫りにされた。このような試みは今までになされていない。

このような事実に基づいて、つぎに要介護者に対する在宅介護者の続柄とソーシャルサポートの程度およびストレスの関係を調べた(研究5)。さまざまな事実が分析されたが、このように在宅介護者の属性を詳細に分析することは在宅介護者の状態を理解する上で重要であることを認識させてくれる。

つぎに要介護者の寝たきり度と痴呆のレベルと在宅介護者へのソーシャルサポートの程度や健康感との関係が調べられた(研究6)。その結果で興味深いのは、在宅介護者へのソーシャルサポートは、要介護者の状態との関係でその程度が変わるということである。このような事実の指摘は、要介護者の状態に応じた在宅介護者への配慮を考えさせられるものである。

在宅介護者のストレスへの対処はどのようにしたらよいのか、理解しておく事は


重要である。このために在宅介護者のストレスコーピングの因子を分析し、尺度を作成した（研究7）。その結果、興味深いのはこれらのどの因子もソーシャルサポート（特に情緒的サポート）との関連が深く、特にソートストッピング対処は非効果的サポートと逆相関があったことは納得させられるものである。


以上の諸研究を踏まえ、最後に在宅介護者の健康感モデルの構築が試みられた。ストレスを原因とし、それに対してソーシャルサポートとストレス対処で対応し、その結果介護効力感を生み、介護バーンアウトを低め、健康感を維持し高めると言う流れを仮定して、パス解析を行なった（研究8）。このような試みは初めてであり、今後在宅介護者のソーシャルサポートと健康感の関係を全体的に理解してゆくのに役に立つものである。


更に在宅介護者へのソーシャルサポートの実践として、コンピュータネットワークの構築を試みた（研究9）。これは他にない新しい試みであるが、結果的に参加者の数（5名）が少なくなり事例研究にとどまった。今後の課題である。

以上の諸研究は以下の諸点で高く評価できる。1）在宅介護者へのソーシャルサポートの心理学的研究はまだあまりなされていない。2）特に健康心理学的観点からの研究は少なくこれからの課題である。3）在宅介護者のソーシャルサポートの程度を測定する尺度の開発、とくに否定的なソーシャルサポートを含む尺度の開発。4）在宅介護者のソーシャルサポートと健康感の状態を、比較群を設けて検証を試みたこと。5）在宅介護者のさまざまな属性（続柄など）や要介護者の重症度と在宅介護者のソーシャルサポートや健康感の関係を分析したこと。6）在宅介護者の心理的な健康を考えていくために、彼らの健康感にソーシャルサポートなどの要因がどのように関連しているか、構造分析を試みたこと。以上のように、在宅介護者の支援のための心理学的な研究を体系的に試みたもので、高く評価することができる。よって博士(人間科学)の学位を授与するに値するものと認める。

石川 利江氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査委員 早稲田大学教授 文学博士（早稲田大学）春木 豊 

審査委員 早稲田大学教授 博士(人間科学)(早稲田大学) 嵯峨座 晴夫 

審査委員 早稲田大学教授 教育学博士（九州大学）門前 進 

審査委員 長野県看護大学教授 医学博士（東京大学）見藤 隆子 